

魚病の発生状況(平成10年度)*

竹内 照文・服部 未夏

目 的

近年、当県における養殖漁業の生産高は7,000トン前後でほぼ横ばいに推移しているが、養殖魚の疾病は増加するとともに多様化している¹⁾。特に、イリドウィルス感染症のような治療困難な疾病が猛威を振るっているが、このような状況に対応するためには防疫対策が重要であり、一層充実させることが急務となっている。

ここでは今年度の魚病発生状況を整理し、防疫対策を充実させるための資料とする。

方 法

病魚は養殖業者が当场に持ち込んだり、防疫パトロール時に採取したものである。ただ、健康診断として持ち込まれたものは除外し、また、同じ業者が同一水槽(生け簀)から1週間に3、4回と連続して持ち込み、これが同一の疾病であると判断される

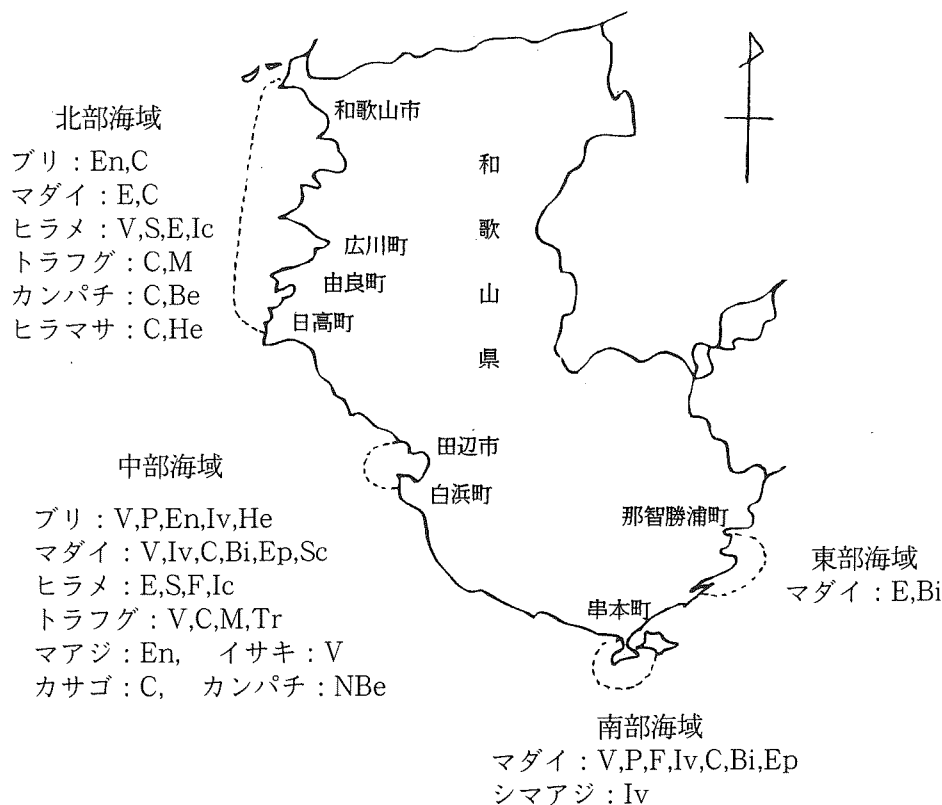


図1 魚病の分布状況

V : ビブリオ病, P : 類結節症, En : 連鎖球菌症 (α型), S : 連鎖球菌症 (β型)
F : 滑走細菌症, E : エドワジェラ症, Iv : イリドウィルス感染症, C : 白点病
Bi : ビバギナ症, Tr : トリコディナ症, Ic : イクチオボド症, Be : ベネデニア症
NBe : ネオベネデニア症, Sc : スクーチカ症, Ep : エピテリオシスチス症
M : 微胞子虫症

* 養殖水産動物保健対策推進事業費による。

表1 魚種別・月別の病魚診断件数

魚種	病名	1998年										1999年			計		
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3月				
ブリ	ビブリオ病			1													1
	類結節症		1	5													6
	類結節症+イリド			1													1
	連鎖球菌症			1	3	2	2							1			9
	白点病									1							1
	ヘテラキシネ症									1							1
	不明								1								1
小計		0	1	8	3	2	3	2	0	0			1	0	0		20
マダイ	ビブリオ病			3	1	1											5
	エドワジエラ症	1						1									2
	滑走細菌症													1			1
	類結節症+イリド				1												1
	イリドウィルス感染症							6	6								12
	イリド+エピテリオシスチス病				1												1
	イリド+ビバギナ症				1	1			1								3
	イリド+白点病								1								1
	ビバギナ症		1	1												1	3
	エピテリオシスチス病				1	1											2
	エピテ+ビバギナ症	2	1														3
	白点病							1	3								4
	白点病+ビバギナ症										1						1
	スクーチカ症													1			1
	環境障害															1	1
不明				2	1				1							4	
小計		3	2	4	7	4	8	11	2	0			0	2	2		45
ヒラメ	ビブリオ病	1	1	2										1			5
	滑走細菌症	1	3														4
	エドワジエラ症		2		2	1	1		2				1		1		10
	連鎖球菌症				5	3	8	7	4								27
	連鎖球菌症+エドワジエラ症				1				1								2
	エドワジエラ症+滑走細菌症			1													1
	エドワジエラ症+イクチオボド症		1														1
	イクチオボド症	2		1											1		4
	環境障害												1				1
	不明	2															2
小計		6	7	4	8	4	9	7	7	1			1	2	1		57
トラフグ	ビブリオ病							1									1
	微胞子虫症				1	1		1									3
	トリコディナ症									1							1
	白点病									2							2
	白点病+微胞子虫症								1								1
	不明							1	1		1						3
小計		0	0	0	1	1	2	3	3	1			0	0	0		11
シマアジ	イリドウィルス感染症			1						1							2
カンパチ	白点病+ベネデニア症								1								1
	ネオベネデニア症													1			1
ヒラマサ	白点病+ヘテラキシネ								1								1
マアジ	連鎖球菌症	1															1
イサキ	ビブリオ病					1											1
ハタ(交配)	栄養性疾患					1											1
カサゴ	白点病		1														1
合計		10	11	17	19	13	22	25	13	2			2	5	3		142

イリド：イリドウィルス感染症，エピテ：エピテリオシスチス症

ような場合は1件として扱っている。

病魚は外部症状や解剖による内臓の病変を観察をした後、常法に従って寄生虫と細菌の検査を行った。分離した細菌は抗血清により簡易同定した後、ディスク法により薬剤感受性試験を実施した。また、イリドウィルス感染症についてはギムザ染色とモノクローナル抗体法により検査を行った。

以上の検査結果をもとに、漁業者に対する診断・指導を行った。

結 果

魚種別・月別の病魚の診断件数を表1、魚病の分布状況を図1に示す。病魚は11魚種で、前年度に比べると3種類多かったが、総診断件数は142件で前年度と同程度であった²⁾。魚種別の診断件数はブリ20件、マダイ45件、ヒラメ57件、トラフグ11件で、この4魚種で全体の93%を占めている。また、ヒラメの診断件数が最も多いが、これは数年来の傾向である¹⁾。ヒラメの養殖業者は3経営体で、生産量はブリやマダイに比べると極めて少ないが、陸上水槽で養殖しているため斃死の確認がしやすく、このことが持ち込み件数の多い原因と考えられる。

以下、魚種別に疾病の特徴について検討した。

ブリはモジャコの採捕される初夏から高水温期に疾病が多く、秋、冬季にはほとんどなかった。原因(病因)別には細菌感染症が最も多く全体の85%を占めているが、これを時期別にみると、モジャコ採捕直後に類結節症が多く、その後、連鎖球菌症が高水温期を中心に多発した。イリドウィルス感染症は類結節症との合併症が1件で今年度は非常に少なかった。また、寄生虫症は2件であった。

マダイはイリドウィルス感染症の関連したものが18件で最も多く、ここ数年来の特徴である。本疾病は斃死率が高く、長期に及ぶため被害量も多かった。また、本疾病はこれまで北、中部海域で猛威を振っていたが、今年は同海域で発生が少なかった反面、昨年、小規模な発生が確認された南部域で8

～11月まで罹り、大きな被害があった。また、東部域でも発生し、マダイを中心に多くの魚種に被害をもたらした(聞き取り情報による)。寄生虫症は19件で、このうち、エラ虫症(ビバギナ、エピテリオシスチス)は水温上昇期に多く、白点病は秋季に多発した。

ヒラメは細菌感染症が50件で、全体の88%を占めている。このうち、エドワジェラ症は周年、また、連鎖球菌症は初夏から秋季にかけて発生する傾向が認められた。中部地区では8月下旬に襲来した台風による濁水が水槽に入り、その後、連鎖球菌症が発生した。この時、薬剤感受性試験では塩酸オキシテトラサイクリンに感受性が見られたので、投薬したが、高水温によるストレスが影響したのか投薬効果は全くなく、長期にわたり、大きな被害があった。また、春季、小さな個体に滑走細菌症が発生し、発見が遅れた業者は大きな被害を出した。寄生虫症ではイクチオボドが4件であり、また、イリドウィルス感染症は今年度も確認されなかった。

トラフグは寄生虫症が多く、微胞子虫症と白点病の関連したものが6件であった。このうち、微胞子虫症は出荷直前の成魚に罹り、摂餌不良を伴うためやせ症となり、商品価格の低下を招いた。

その他の魚種ではシマアジの稚魚にイリドウィルス感染症が発生し、大きな被害があった。また、カンパチ、ヒラマサとカサゴに白点病が発生したが、このうち、陸上水槽で飼育中のカサゴ稚魚はほぼ全滅した。

文 献

- 1) 竹内照文(1999):水産増殖試験場への病魚の持ち込みから見た魚病の発生状況。水試だより、6-8。
- 2) 服部未夏・竹内照文(1998):養殖水産動物保健対策推進事業。平成9年度和歌山県水産増殖試験場報告 30号、14-18。